

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：32601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25580064

研究課題名(和文)ヘンリー・ジェームズと日本：19世紀末ボストンの日米芸術交流に見る自己探求の軌跡

研究課題名(英文)Henry James and Japan: the Pursuit of Selfhood in the Artistic Exchange between Japan and America in Nineteenth-Century Boston

研究代表者

福田 敬子 (FUKUDA, Takako)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：80276005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカ人作家ヘンリー・ジェームズは日本に来ることはなかったが、ジャポニズムに沸くボストンのガードナー家に出入りしていた岡倉天心と知り合いとなり、日露戦争勃発時にはワシントンでルーズベルトと会談するなどして、自分が「アメリカ人」かつ「国籍離脱者」であることの意味を考える機会を得た。

同時期、彼を含む多くのポストニアンがヴェネツィアにも押し寄せていたが、彼らもまた自らの文化に行き詰まりを感じ、異文化との接触を通じて自己発見をすることを目指していた。

このように、これまで見落とされてきたジェームズと日本の関係をたどることで、ジェームズのみならず、19世紀アメリカ全体の文化的精神状況が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Henry James, an Irish American Novelist, never visited Japan during his lifetime. However, in 1905, the second year of the Russo-Japanese War, he dined with Theodore Roosevelt in Washington D. C., who had been trying to end the war. In addition, the presence of Okakura Tenshin, a famous Japanese art critic of the Meiji Period, made James think of his American selfhood as well as the meaning of being an outsider and an expatriate. The fact that many Japonisme enthusiasts in Boston flocked to Venice means that they also struggled to find their own selfhood through the contact of the unknown culture. It is possible to say that those Bostonians thought themselves outsiders and felt uncomfortable in Boston even though they were born and brought up there. Therefore, the study of the relationship between James and Japan has led to elucidate the cultural characteristics specific to late nineteenth-century America, especially Boston.

研究分野：アメリカ文学、アメリカ史、日米史

キーワード：ヘンリー・ジェームズ ジャポニズム ボストン イザベラ・スチュワート・ガードナー ヴェネツィア ジェームズ・マクニール・ホイッスラー 岡倉天心 ロンドン・ジェントルマンズ・クラブ

1. 研究開始当初の背景

アメリカ人小説家のヘンリー・ジェイムズ (Henry James 1843-1916) は、1881年の小説『ある婦人の肖像(*The Portrait of a Lady*)』の中で、美術品蒐集家のオズモンドに、「日本に行けるなら小指を失ってもよい」と言わせている。しかし、その後オズモンドが日本に来ることはない。また、ヒロインのイザベル・アーチャーも、旅行先の可能性として日本の名を挙げておきながら、実際の世界旅行のルートに日本を含めることもなかった。

「心理小説家」として知られ、ヨーロッパとアメリカをめぐる「国際状況もの」を得意とする作家が描くこの展開は、欧米の読者からするとごく当たり前で、矛盾は感じられないかもしれないが、日本人読者としては大いに不満が残る。

なるほど、確かに 1881年の時点では日本をよく知らなかったジェイムズには、日本旅行の場面を詳しく描くことはできなかつただろう。また、そもそもここで日本に言及したのも、当時の欧米の日本熱に便乗した単なる読者サービスだったのかも知れない。

実際、アメリカ人でありながらヨーロッパに移住し、最後はイギリス国籍を取得したジェイムズの関心は欧米だけに向けられていて、アジア、特に日本に向けられることはほぼ皆無だったと、これまでずっと言われてきた。

しかし、同じころ、ジャポニズムに沸くボストン在住の彼の友人の多くは、次々に日本を訪れていた。ジェイムズがイギリスに移住した後に、ほぼ毎年のようにヨーロッパで会い、帰国した際には必ず会っていたボストン社交界の女王イザベラ・スチュワート・ガードナー (Isabella Stewart Gardner 1840-1924) は、日本ではおなじみのモース (Edward Sylvester Morse 1838-1925) の講演の影響を受け、1883年に日本を訪れた。

そのとき彼女の世話をしたのがビゲロー (William Sturgis Bigelow 1850-1926) とフェノロサ (Earnest Fenollosa 1853-1908) である。

また、ジェイムズの親友ヘンリー・アダムズ (Henry Adams 1838-1918) やジョン・ラ・ファージ (John La Farge 1835-1910) も、1886年に日本へ旅立った。彼らの世話をした岡倉天心 (1863-1913) は、その後ガードナーの家に出入りし、1905年にはボストン美術館の中国・日本美術部の顧問に正式に就任することになる。

ジェイムズがボストン滞在中に天心と出会った可能性はきわめて高く、1908年にはロンドンで会食をしていることもわかっている。そのような環境にありながら、日本への言及が少ないからという理由だけで、ジェイムズが日本を意識していなかったと言うことはできない。

そこからわいた疑問が、「ジェイムズは、本当は日本を意識したことがあったのではないだろうか」ということだ。

これは、これまでのジェイムズ研究にはまったくなかった視点である。

2. 研究の目的

ジェイムズの親しい友人であったガードナー、アダムズ、ラ・ファージをはじめ、モース、ビゲロー、フェノロサ、ローウェル (Percival Lowell 1855-1916) ら、彼の周辺にいた人々の多くが日本に強い関心を持っていた。彼らのほとんどがボストン周辺の出身者か、ハーヴァード大学関係者である。いわゆる「お雇い外国人」にもボストンと縁が深い者が多い。そこで出てきた次の疑問が、「なぜボストニアンは日本に来たがったのか？」ということと、「彼らはなぜ日本の骨董品、美術品をほしがったのか？ただ単に流行を追って、金任せで欲しいものを買っただけなのか？」ということである。

ジャポニズムが流行していた時代のポストン社会の実態を調べてみると、当時のポストニアンは、日本だけでなく、イタリアのヴェネツィアにも強いあこがれを持っていたことがわかる。ガードナーは、「パラッツォ・バルバロ(Palazzo Barbaro)」と呼ばれる屋敷を借りて、アメリカ人芸術家のたまり場にしていた。そこに集まったのは、必ずしも「国籍離脱者」と呼ばれるような人々だけでなく、「ポストン・ブラーミン(Boston Brahmin)」と呼ばれる旧家出身の名士や、裕福な知識人や芸術家たちが多かった。

そこでさらに沸いた疑問が、「ポストンの人々は、なぜ『未知』の文化圏へ『逃避』する必要があったのか？」である。当時、アメリカ随一の歴史都市、文化都市と見なされながら、なぜ外の「未知の世界」にばかり目を向けなければならなかったのか。

このような流れで、以下の問題点を検証することが、本研究の主な目的となった。これらの問題が解明されれば、単なるジャポニズムやジェームズ研究を超えた学際的な成果があがるものと確信したからである。

- (1) ジェームズ自身が日本についてどの程度意識していたか。意識していなかったとしたら、それはなぜか。
- (2) 私設美術館を設立したイザベラ・スチュワート・ガードナーがポストンの美術界やジェームズの作品に与えた影響。
- (3) ポストニアンの多くが日本文化にあこがれた本当の理由。
- (4) ポストニアンの多くがヴェネツィアにあこがれた理由。
- (5) ジェームズの「アウトサイダー」性、「アイルランド」性。
- (6) ジェームズ同様アメリカ人で、「国籍離脱者」と呼ばれるホイッスラー(James Abbot McNeill Whistler 1834-1903)、サージェント(John Singer Sargent 1856-1925)がヨーロ

ッパで感じていた「アウトサイダー」性。

(7) 19世紀末～20世紀初頭にかけてのアメリカ人の精神構造。特に歴史文化都市ボストンの人々の心理的特徴。

(8) 岡倉天心とジェームズの接点。

(9) 山中定次郎(1866-1936)、松木文恭(1854-1919)など、日本人美術商が果たした役割。

3. 研究の方法

まずは、ジェームズ、ガードナー、ボストン、ジャポニズム関連など幅広い分野の図書を読むことから始めた。データベースでの調査が欠かせなかったが、日本では見ることのできない19世紀のアメリカの新聞、雑誌記事を検索するためには、海外の研究機関や図書館まで赴く必要があった。

本研究は分野的には主にアメリカ文学やアメリカ研究に属するため、妥当な順番として、まず最初にアメリカに行くことになった。具体的な場所としては、研究対象であるジェームズとガードナーになじみが深いボストンが主要な目的地となったが、二人の出身地であり、資料がより充実した研究機関の多いニューヨークにも赴いた。公共図書館、大学図書館も有用であるが、美術関連の調査も必要なため、メトロポリタン美術館などの美術館内の図書室にも足を運んだ。

ジェームズ同様「国籍離脱芸術家」と呼ばれるホイッスラーの資料を集めるためには、ロンドンの大英図書館ほか、スコットランドのグラスゴー大学、ワシントン D.C.のフリーア・ギャラリー内の図書室にも行く必要があった。

岡倉天心や松木文恭、山中定次郎の資料については、ボストンやニューヨーク以外に、ワシントン D. C.の議会図書館はもちろんのこと、アメリカ美術公文書館蔵のマイクロフィルムを精査する必要があった。

アメリカ人のたまり場となっていたヴェネツィアでは、国立マルチャーナ図書館、フ

オスカー大学図書館が助けとなった。

また、ガードナーが管理し、アメリカ人の友人を招いていた「パラッツォ・バルバロ」や、ジェームズの友人で自ら命を絶ったコンスタンス・フェニモア・ウルソン(Constance Fenimore Woolson 1840-94)の終焉の地など、アメリカ人が存在していた証を直接確認した。

さらに、ジェームズのイタリア紀行文『郷愁のイタリア(*Italian Hours*)』(1909)に書かれている地理的な場所、教会、建物、絵画の跡を現地で実際にたどっていったことが、アメリカ人のイタリアへの思いを理解するもっとも効率的な方法であった。

4. 研究成果

平成 25 年度については、ジェームズとガードナーの関係をより深く考察するため、ボストンとニューヨークで調査を行った。二人について調査するうち、ガードナーに美術品を売っていた松本文恭が、ボストン社会における日本人の代表として非常に大きな影響力を持っていただけでなく、シカゴの富豪で後にフリーア・ギャラリーを設立するフリーア(Charles Lang Freer 1854-1919)とも取引関係にあることがわかったため、19 世紀末に日本人美術商が果たした役割について、集中的に調査を行うことになった。

平成 26 年度は、前年に引き続き、松本文恭の調査を優先した。日本人美術商に関する研究を進めた一方、ガードナーと松木、ガードナーと岡倉天心の間で交わされた書簡調査や、松木が尊敬していたというホイッスラーに関する研究も必要であることが判明し、ワシントン D. C. で本格的な調査を行うことになった。

平成 27 年度は、大英図書館ほか、グラスゴー大学でホイッスラーを中心に調査を行った。その際、ホイッスラー同様、ヨーロッパで活躍したアメリカ人画家サージェント

にも着目。ジェームズ、ホイッスラー、サージェントらがロンドンのジェントルマンズ・クラブで繰り広げた「アウトサイダー」vs「イギリス人」の闘いぶりを探り、「国籍離脱者」のアイデンティティ獲得の軌跡について考察した。そのさい、岡倉天心もまたロンドンのジェントルマンズ・クラブに加入していたことが判明し、イギリスで外国人が成功するためにはクラブが重要な役割を果たしていたことを見いだした。

一方、ジェームズが 20 数年ぶりにアメリカに戻った時期がちょうど日露戦争勃発直後であって、戦争終結を目指すセオドア・ルーズベルト(Theodore Roosevelt 1858-1919)と会食し、更には親露派で日本を嫌うウィリアム・ディーン・ハウエルズ(William Dean Howells 1837-1920)とも会っていたことがわかり、ジェームズが日露戦争を話題にしたことがあった点がはっきりした。

平成 28 年度は、イタリア方面の資料収集を中心に行った。ヴェネツィアでは、ガードナーが借り、ジェームズを含む多くのアメリカの文化人が集まったパラッツォ・バルバロを訪れたほか、ジェームズのイタリア紀行文『郷愁のイタリア』に描かれた地域、街並み、教会などの建築物、芸術作品を実際に見ることで、アメリカ人がイタリアのどの部分に魅かれていたのかを理解するヒントを得た。

以上のような調査研究活動から、アメリカ人作家ヘンリー・ジェームズは、日本に来たことはなく、作品内での日本への言及は少ないものの、決して日本を意識していなかったわけではないということが明らかとなった。

彼の友人の多くはジャポニズムに傾倒していたし、ジェームズ自身も岡倉天心とロンドンのクラブで会食して意気投合していた。ジェームズは図らずも、自分が「アメリカ人」かつ「アイルランド系」で、さらには「アウ

トサイダー」であることの意味を考える機会を日本から得ていたのである。

同時期、日本びいきの多くのポストニアンが、日本のみならずヴェネツィアにも押し寄せていたが、彼らもまた自らの文化に行き詰まりを感じ、自分自身を見つけるために「異文化」との接触を必要としていたこともわかった。

このように、これまで見落とされてきたジェイムズと日本の関係をたどることで、ヨーロッパを放浪する「国籍離脱者」のみならず、19世紀のアメリカ人全体が文化的にどのような精神状況にあったかが浮き彫りになった。

一方、大西洋の向こう側の欧州列強の存在を意識しつつ、自国のアイデンティティと進むべき道を模索していたこの時代のアメリカ人の文化的・政治的・経済的な営みに、開国後数十年を経て、やはり自分たちの立ち位置を見極めようとしていた松木文恭のような無名の日本人の存在が大きく関わっていたという事実は、日米関係の歴史を考えるうえで注目されるべきことだと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 福田敬子、「ヘンリー・ジェイムズとイザベラ・スチュワート・ガードナー：明治期における日本とボストンの芸術交流についての一考察」青山学院大学文学部『紀要』査読なし、第56巻 2015年 77-96。

〔学会発表〕(計2件)

- (1) 福田敬子、「アメリカ人芸術家のロンドン・クラブライフ：ヘンリー・ジェイムズを中心に」アメリカ学会第50回年次大会、2016年6月4日、東京女子大学(東京都杉並区)。
- (2) 福田敬子、「モースの愛弟子(?)のアメリカ体験：美術商人松木文恭(1867-1940)

の『アメリカその日その日』 日本アメリカ史学会 第11回(通算39回)年次大会、2014年9月28日、亜細亜大学(東京都武蔵野市)。

〔図書〕(計2件)

- (1) 福田敬子、音羽書房鶴見書店、「妖怪大戦争? : アメリカ人国籍離脱者たちのロンドン・クラブバトル」『英米文学とお化けたち』(仮題)(福田敬子、松井優子、上野直子編)2018年出版予定。
- (2) 福田敬子、英宝社、「見えない越境 ヘンリー・ジェイムズと日本を結ぶ点と線」『ヘンリー・ジェイムズ、いま 歿後百年記念論集』(里美繁美、中村善雄、難波江仁美編)2016年、332-352。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

福田 敬子 (FUKUDA, Takako)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：80276005